



鹿児島日英協会 ニュースレター 第2号

The Japan British Society of Kagoshima

Newsletter No.2 March 2015

会長ごあいさつ ～ニュースレター第2号発行に寄せて～

昨秋創刊のニュースレターがお蔭さまで第2号発行の運びとなりました。

今年は薩摩藩留学生渡英150周年の記念すべき年です。2月から3月にかけて勤務校(志学館大学)の剣道部並びに語学研修生とともに英国を訪問し、英国の方々との交流を深め、更にはロンドン大学(UCL)の薩摩藩留学生記念碑も訪問し、先人達の偉業に改めて敬意を表して参りました。秋には3回目となる『薩英文化祭』で関連イベントを実施し、英国との交流を更に促進する予定です。当協会の活動に引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

鹿児島日英協会会長 酒瀬川純行(志学館大学人間関係学部長・教授)



上段…講演会、懇談会の様子 / 下段…平成26年薩英文化祭の様子

目次

- ① 平成27年度第1回理事会・第23回鹿児島日英協会総会・講演会・懇談会のご報告 p.2
 - 1. 平成27年度第1回理事会・第23回鹿児島日英協会総会
 - 2. 渡辺正清氏 講演会「薩摩藩留学生が英国で考えたこと」
 - 3. 懇談会
- ② 鹿児島日英協会 青年部創設：副会長ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・ p.3
- ③ 平成26年薩英文化祭の様子・・・・・・・・・・・・・・・・ p.4-5
- ④ 「遠い崖」・ウィリス断章・・・・・・・・・・・・・・・・ p.6-7
- ⑤ 英国便り・・・・・・・・・・・・・・・・ p.7
- ⑥ 英国紀行・・・・・・・・・・・・・・・・ p.8
- ⑦ 事務局より・・・・・・・・・・・・・・・・ p.8

①平成27年度*第1回理事会・第23回鹿児島日英協会総会・講演会・懇談会のご報告

(平成26年11月14日開催、於：鹿児島県医師会館) ※平成26年10月1日～平成27年9月30日

1. 平成27年度第1回理事会・第23回鹿児島日英協会総会

総会に先立ち、理事会が行われました。平成26年度の事業内容、収支決算、監査結果、事業計画(案)、予算(案)について報告いたしました。また、平成27年度からの青年部創設とそれに伴う本協会会則改正の承認をお願い致しました。出席者の皆様に、すべての事項に承認を得ることができました。(具体的な内容につきましては、当日出席して頂いた会員の方には配布、欠席された方には郵送してお知らせ致しております。)

今後、青年部の活動内容を少しずつ軌道に乗せて行く予定ですので、ご理解とご協力を頂けましたら幸いです。なお、理事会にて青年部の年齢設定についてご意見がありました。今後の議題として取り上げ、決定していく予定です。

お忙しい中、お時間を作って下さり、足を運んで下さった理事ならびに会員の皆様に感謝申し上げます。引き続きご協力とご理解の程どうぞよろしくお願い致します。



2. 渡辺正清氏 講演会「薩摩藩留学生在英国で考えたこと」

ノンフィクション作家である渡辺正清氏の講演会が、「薩摩藩留学生在英国で考えたこと」という演題で行われました。1865年4月に薩摩の羽島浦を出航してから約2か月後、英国のサザンプトンに到着し、ロンドンに移動した留学生在が、電報、汽車、ガス灯や西洋式建物等の英国文明に興奮した様子、薩摩藩だけではなく他藩もイギリスへ秘密裏に留学生を送り込んでいたこと、そして当時のイギリス産業革命の光と影の部分に興味深いエピソードを交えながらお話して下さいました。

ロンドンで留学生一行を出迎え、若干13歳のやんちゃな長沢鼎を自宅に引き取ったジェームス・グラバーを始め、日本の将来を見据えながら留学生の視野を広げようと努めたローレンス・オリファント等との素晴らしい人々との巡り合せも、日本の近代化につながったようです。沢山の珍しい写真や資料を通して、分かりやすく紐解いて下さいました。

3. 懇談会

講演会の後、青年部、長崎県ローンボウルズ協会、ALT、薩英文化祭関係者の皆様も合流され、懇談会が行われました。株式会社ベルグ様(山形屋グループ)のご協力で準備して頂いた美味しい料理と長沢ワインを片手に、参加者の皆様は交流を楽しんでおられました。とても賑やかな懇談会となりました。長時間にわたり、最後まで参加して下さいました皆様に感謝申し上げます。

鹿児島日英協会 事務局 蔵本真衣



懇談会の様子



長崎県ローンボウルズ協会



在鹿英国人の皆さん

② 鹿児島日英協会 青年部創設：副会長ごあいさつ

皆さんこんにちは。この度鹿児島日英協会青年部副会長に就任致しました神田と申します。私の自己紹介を少しお話しすると大学時代に本協会会長の酒瀬川教授の下、英国の文化、歴史等を専門に学んでおりました。現在は、いぶすき農協という職場で勤務しております。

今回の青年部創設につきましては、現在イギリスと関わりの少ない中、何か関わり合える機会がないかと思ったところに酒瀬川教授よりお話をいただいた為、参加しようと決意しました。青年部副部長という大役を私が持つことができるかととても不安がありますが、どうぞよろしくお願い致します。できる限り頑張りたいと思います。

私が初めてイギリスについて深く知ることができたのは、大学時代に酒瀬川教授とイギリスへ語学学習に行った時でした。イギリスの地に初めて踏み入れた時は、日本の雰囲気との差、匂い、気候等々なにか別世界にいるような感じでした。イギリスの地で私のお気に入りにはシャーロック・ホームズミュージアムでした。有名な著者コナン・ドイルによって描かれた架空の人物ホームズの暮らしや所持していたものを目で見ることができとても幸せでした。また、ほかにもイングリッシュガーデンも興味があり、帰国後は花を植えることに大変興味をもつようになりました。また行ってみたいです。

鹿児島日英協会 青年部会員 副会長 神田浩之

早春の候、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。鹿児島日英協会青年部、副会長を務めることになりました川畑です。スタートラインにたったばかりの青年部を皆様と一緒に盛り上げていきたいです。会員の皆様におかれましては、英国への深い思い入れがあるかと存じます。英国がお好きな方、行ったことがある・行きたい方、お仕事で関係がある方もいらっしゃるのでしょうか。私も一度だけ英国ロンドンに語学研修に行った経験があります。ホームステイをしながら語学学校に通い、大学都市OxfordやCambridge、文豪シェイクスピアの故郷Stratford-upon-Avon、ホワイトクリフのあるDoverに日帰り旅行で行くなど3週間という短い期間でしたが充実した研修でした。学校でのディベティング授業に、うまく参加できなかったほろ苦い経験も今となっては良い思い出の一つです。

また個人的には昨年韓国に行った際、語学研修時に知り合った韓国人の友人と再会する機会がありました。会うまでは英語から何年も離れており、期待と不安でいっぱいでしたが、いざ会うと時間を感じず英語・日本語・韓国語をまぜて不思議と会話が弾みました。

私は「英語が好き」という気持ちからはじまり、「英国が好き」になり、実際に行ったことにより、ますます興味がわき、「もっと英語を話せるようになりたい」そう強く考えるようになりました。小さな私の世界が英国や英語と出会いにより、少し広がったと感じています。鹿児島での英国との交流や紹介などの場を皆様と一緒に作り上げていきたいと思いますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



鹿児島日英協会 青年部会員 副会長 川畑郁美

③ 平成 26 年薩英文化祭の様子

平成 26 年 11 月 15 日、明治維新 150 年カウントダウン事業の一環として、鹿児島市中央公園で薩英文化祭（鹿児島市主催、鹿児島日英協会協力）が開催されました。

この明治維新という歴史上的一幕で、薩摩と英国がたびたび登場するのは、鹿児島県民にとってはなじみ深い事柄と思います。それは、明治維新の起こった 1968 年前後における薩摩と英国のかかわりが、その後の歴史や日本という国の近代化を語る上で切っても切れない関係性を持っているからです。具体的には、生麦事件から薩英戦争にはじまり、薩摩と英国という双方の文化が衝突したことでより深いコミュニケーションが生まれたこと。それにより、薩摩藩士の目が海外という大きなフィールドに向けられたこと。革新的な概念を世界に学ぼうと、薩摩藩士が英国へ留学し、情報を持ち帰ったこと。これらは、それまで国内だけで文化・経済を完結しようとしていた日本を大きく変える発端となりました。

このたびのイベントは、我々鹿児島日英協会の会員のみならず一般参加の方々も含めて、これらの歴史を再認識し、また郷土・鹿児島とイギリスの文化を知るきっかけ作りに大変有意義なものになったと思います。本記事では、薩英文化祭で催されたイベントのレポートをお届けいたします。本イベントは会場内のステージで行われるものと、ステージ周辺の常設テントで出店されているものの主に 2 通りのイベントがありました。

まずステージでは、地元の小学校から大学までの吹奏楽部や、一般のアーティスト、グループなどによるパフォーマンスが行われました。志學館大学ロック部によるイギリスのロックバンド・ビートルズのカバーは、聞き覚えのある人も多かったのではないのでしょうか。また、長崎グラバーパイプバンドによるスコットランドの民族楽器・バグパイプによる演奏は独特の堂々とした音楽で会場の人々を楽しませました。いずれの演奏もイギリス発の音楽を中心に構成されており、歴史豊かなイギリスの音楽文化の一端に触れることができました。たくさんの方が集まった緑爽やかな中央公園に、ステージ出演者の方々の賑やかな旋律が響いていました。

※ 右写真は長崎グラバーパイプバンドによるバグパイプ演奏。
バグパイプはイギリス北部・スコットランドの民族楽器で、脇に抱えた留気袋に息を吹き込み、それを押し出すことでパイプ内のリードを鳴らす仕組み。留気袋は鞆（ふいご）になっているので、息継ぎに関係なく常に音楽を奏で続けることができる。



また「西洋との歴史を学ぼう！」のコーナーでは、志學館大学人間関係学部教授・原口泉先生の特別公演が行われました。演題テーマは「(薩摩)開成所と薩摩藩英国留学生」とあり、薩摩藩における西洋学問のはじまりや、薩摩藩英国留学生たちの様々なエピソード、そして薩摩藩の洋学が後世にどのような影響を与えたかについて、ときに面白く痛快に語って頂きました。特に留学生たちの積極性や吸収力、そして異文化に触れたときの体験についてのお話は驚かされるものがあり、当時の留学生の心境に思いを馳せた方も多かったのではないのでしょうか。



※ 原口泉先生特別公演「(薩摩)開成所と薩摩藩英国留学生」。括弧書きの(薩摩)は、江戸幕府が開成所、現在の東京大学の原型となった開成所と、薩摩藩の開成所を区別するため。

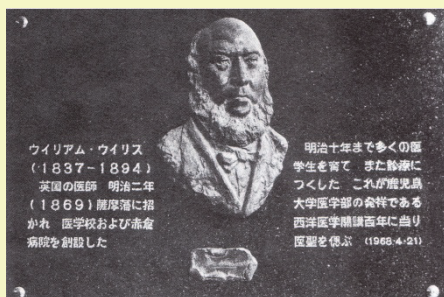
一方の常設テントでは、薩摩・英国にちなんだ物品を販売していました。薩摩発の商品としては、海外で SATSUMA と呼ばれている熊本県長島市のみかんが販売されており、ステージ上でも賑やかな PR が行われました。また英国発の商品としては、知覧町にある薩摩英国館の紅茶、いちき串木野市薩摩藩英国留学生記念館のコーヒー、天文館にある英国風パブ Big Ben のお酒などが販売されていました。また、百年近く前に英国から贈呈され、百年近く南種子町で育てられているインギー地鶏も販売されていました。インギー地鶏は 1894 年に漂着した英国帆船を助けた御礼に英国から贈られたもので、ここでも薩摩と英国の深いかわりが垣間見えます。

さらに、中央公園の芝生グラウンドでは、長崎県ローンボウルス協会の方々にお越し頂き、イギリス発のスポーツ「ローンボウルス」体験が行われました。これは芝生で行うカーリングに近いスポーツで、奥行きが 30m 程のフィールドを使います。最初にジャックと呼ばれる白球を遠くに投げ、次に重心が偏った円柱状に近い球(ボウル)を白球に近づけるように投げます。数人一組のチームごとに 2 回ずつ交代で投げ、最終的に白球の一番近くにボウルを置いたチームが勝利となります。ボウルの重心が偏っているため真っ直ぐ転がらないことが多く、また既に配置されているボウルが中心から弾かれたりと、テクニカルな要素が多いスポーツでした。しかし、一投ごとのアクシデントに一喜一憂があり、参加者の方々からは慣れない競技ながらも楽しむ声が聞かれました。

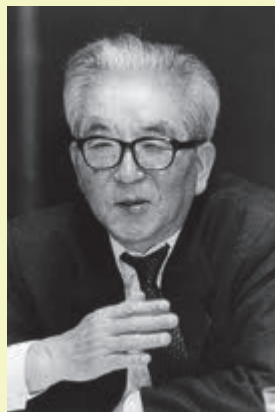
さて、薩摩と英国は地理的にこそ地球のほぼ反対側に位置していますが、今回のイベントで身近に感じられた方々も多かったように思います。私自身も、双方の意外な共通点や歴史を発見することができ、多くの驚きをもらいました。そして、お互いの文化を知り、尊重することは、150 年近い年月が変わった今でも普遍的な価値を持っているということを体感することができました。

鹿児島日英協会 青年部会員 広報担当 久保田克彦

④ 「遠い崖」・ウィリス断章



William Willis
(1837-1894)



萩原延寿
(1924-2001)

1978 年秋 10 月に鹿児島大学医学部に赴任した。基礎棟玄関脇にはウィリアム・ウィリスのレリーフがあり、教室には鹿児島大学医学部第二内科佐藤八郎教授の書かれた『ウィリアム・ウィリス略伝』が 20 冊ほど残っていた。これは 1968 年が鹿児島に於ける西洋医学開設 100 年目にあたるのを記念して佐藤八郎先生が鮫島近二先生の了解の下、鮫島近二先生収集の資料を中心に、門下生の協力を得て書かれたものであった。そして鹿児島に於ける西洋医学を根付かせたのは他ならぬウィリアム・ウィリスその人であった。以前から医史学に興味を持っていた事もあって、佐藤教授の書かれた本を一気に読んでしまった。

実は小生の鹿児島赴任 2 年前の 1976 年からすでに朝日新聞紙上には萩原延寿先生の『遠い崖』が連載されていた。『遠い崖』の副題はアーネスト・サトー日記抄である。この連載は 1976 年 10 月 12 日から開始されて、休載をはさんで足掛け 15 年、1990 年 12 月 25 日まで合計連載回数 1974 回に及んだ大変な力作である。朝日新聞の連載記事には毎回風間完画伯の軽妙なタッチの挿絵が添えられており、文章のみならず画伯の挿絵を見る事ももう一つの楽しみであった。しかし、多忙や出張などで読み落としはあり、記載がウィリスを離れると尚更その傾向は増した。その記載は正確かつ詳細を極めていいる。いずれ連載が終わればすぐ朝日新聞社から本になって出版されるであろう、読み落としした部分はその時に読み直せばよいと云う風な少し安易な気持ちがあったのも事実である。

1995 年になって鹿児島大学医学部ではウィリス没後 150 年の記念行事を行った。記念講演会、有志によるウィリスの墓参の旅の企画、鹿児島大学医学部雑誌でのウィリス没後 150 年特集号の出版などがその主なものであった。小生はこのうち、ウィリス没後 150 年特集号編集に関わったが、既に本として市販されていると思っていた『遠い崖』は当時 1 巻しか発刊されておらず、全巻の発刊を前提に編集を開始した小生は少しあわて、朝日新聞の縮刷分に掲載されている『遠い崖』を鹿児島大学付属図書館で確認し、やや安心して編集を開始した。

尾辻省悟教授、森重孝先生、駐日英大使を勤められたヒュー・コータッチ卿、ウィリスの母校エジンバラ大学のバロン先生、コータッチの書かれた『Doctor Willis in Japan』の訳者で錦城高校副校長の中須賀哲朗先生、戊辰戦争で越後口に従軍したウィリスには郷土史家中沢剛先生、祖先にウィリスの弟子である上村泉三先生を持つ野添良隆先生・鮫島信一先生、ウィリスの墓参に参加された松下敏夫教授、ウィリスの高弟であり東京慈恵会医科大学の始祖である高木兼寛先生とウィリスについては東京慈恵会医科大学の松田誠教授、ウィリスのお孫さんにあたる当時の石川工業高等専門学校助教授の河内浩志先生、墓参の旅を企画した南日本放送の新名主聡氏等からは執筆の快諾を得たが、苦勞して突き止めた宇都宮の御自宅の住所に何度かご寄稿のお願いを申し上げたが、萩原延寿先生からは御寄稿頂けなかった。先生はウィリス研究に関しては『遠い崖』がすべてであること、当時陸奥宗光の本の執筆にたいへん忙しいというのがその主な理由であった。ただ朝日新聞の一人の女性記者をご紹介下さり、『遠い崖』からの引用が必要ならその記者に連絡して引用して欲

しいと、一面識もない小生に応分の配慮をして頂けた事は嬉しい事であった。お目にかかったのは先生お持ちのウィリス関係の資料を黎明館に寄贈され、黎明館に講演で来鹿された時の一度だけである。講演の前に控室で先生にお会いし、執筆依頼時の状況をお話し、儀礼的な短い時間言葉を交わした。講演は先生の御希望で座ったままなされウィリスに関する該博な知識を淡々とお話された。

『遠い崖』はアーネスト・サトーの日記資料を中心に明治維新前後の日本を大変詳しく記述している。第1巻の「旅立ち」から始まり「薩英戦争」、「英国策論」、「慶喜登場」、「外国交際」、「大政奉還」、「江戸開城」、「帰国」、「岩倉使節団」、「大分裂」、「北京交渉」、「賜暇」、「西南戦争」と続き「離日」に終わる。全14巻はどの巻を取っても詳細で正確な記述に満ちている。

第1巻の「旅立ち」はまさにウィリス特集号と言ってよく、来日以前、駐日英公使館員としてウィリス、戊辰戦争で一躍脚光を浴びるウィリス、外人として初めての入京、鹿児島医学校赴任の経緯、西南戦争での西郷軍への従軍志願などが詳細に記述されている。日本におけるウィリス研究に関しては、今後もこれを凌駕する仕事は出ないのではないかと私は考えている。

鮫島近二先生、佐藤八郎教授、尾辻省悟教授をはじめ鹿児島の人たちが書かれたウィリス関係のものには、ウィリスへの熱い熱い思い入れが時に見られる。かつて、尾辻省悟先生がウィリスの遺書をエジンバラ大学で筆写した時、ウィリスの家族への思いやりに涙し、筆写が進まなかったと云っておられた事を記憶している。一方、萩原延寿先生の記述はウィリスとの間に一定の距離を置き、冷静にウィリスを少し突き放し気味に見ているようにも思われる。小生にはこの二つの立場から見たウィリスへの人々の思いの違いがよくわかるのである。

ウィリスの一生を見てみると、シャムの英駐シャム公使館医官として働いた最晩年のウィリスについての何年かの記述がすっぱり抜け落ちておりこの部の補充が強く望まれる。

鹿児島日英協会会員 理事 村田長芳（鹿児島医療技術専門学校学術顧問・鹿児島大学名誉教授）

⑤ 英国便り

昨年9月から、イギリス、ケンブリッジのアングリアラスキン大学に留学しています加藤桃子と申します。ケンブリッジは歴史的な建物に囲まれており、ライオンヤードやミルロードをはじめ、お土産物から国際的な食材までショッピングを楽しむことができます。ケンブリッジの由来ともなったリヴァークム(river cam)では、パンティングを楽しむこともできます。渡英してイギリスは国際的だという印象を受けました。先程申し上げたミルロードではインドはもちろん、韓国、中国などのアジア各国から、トルコ、サウジアラビアなどの中東各国まで国際的な食材を購入することができます。街中でも、たくさんの言語を聞くことができます。

また、学生の街ということもあり、学生主体のキリスト教団体もさかんで、こちらで親しくなった友人がキリスト教ということで、毎週礼拝に行っています。礼拝と聞けば堅苦しいようなイメージを受けていたのですが、彼女の教会の礼拝はライブミュージックのようにウァーシップソングが演奏され、教えはプレゼンテーションのかたちで行われます。若い世代には親しみやすく、興味深いと思います。また、特に渡英したばかりの留学生にはとてもいい出会いの機会ともなると思います。

私自身の卒業論文のテーマである薩英ブラスバンドの比較もアングリアラスキン大学は芸術に特化した大学であること、文献も日本よりも豊富であることから、とても恵まれた環境で研究を進めることができます。残り6ヵ月余りとなりましたが、英語力向上はもちろん精いっぱい経験をして一瞬一瞬を大切にしていきたいと思います。

鹿児島日英協会 青年部会員 加藤桃子（志学館大学 人間文化学科英語英米文化コース 3年）

⑥ 英国紀行

私は 2009 年に、イギリスでの海外語学研修に参加しました。それまで海外に行ったことがなかった為、不安はありましたが、それ以上に楽しみの方が大きかったです。

研修では、午前中 Hampstead School of English で授業を受け、午後は自由行動でした。尊敬する教授、友人、クラスメイトと共に、ロンドン観光をしたり、パブに行ったりと、イギリスの歴史や文化に触れることができました。

またホームステイ先では、毎晩、ホストマザーの手料理をルームメイトと一緒に会話を楽しみながらいただいたのを覚えています。

この研修で、海外の友人もできましたし、語学だけではなく様々なことを学ぶことができ、良い経験になりました。

そして一番印象に残っているのは、研修期間中に 20 歳の誕生日を迎え、酒瀬川教授や友人に、パブで祝っていただいたことです。これは最高の思い出です。

この研修を充実して終わることができたのは、英語を教えてくださいました教授や共に勉強してきた仲間のお陰だと思います。この思い出を一生の宝物として、これからも語学や歴史・文化を勉強していきたいと思います。

鹿児島日英協会 青年部会員 川崎琴美



⑦ 事務局より

薩摩藩留学生渡英 150 周年記念を迎える今年は、日英友好の大切な節目です。渡辺正清氏の講演では、命懸けで渡英を決断した日本人留学生の勇気と情熱に我々の心が奮起する励ましのメッセージが届けられたように思えました。また、両国において辛い出来事があったのにもかかわらず、日本人留学生を受け入れ、支えて下さった英国の方々に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。今年は、薩摩藩留学生をはじめとする日本人留学生ならびに英国の皆様へ感謝する年です。

最後に、昨年の理事会、総会、講演会、懇談会と薩英文化祭にご参加頂いた皆様、本当にありがとうございました。また、お忙しい中、ニュースレター第 2 号にご協力頂いた会員の皆様に感謝申し上げます。

新会員募集中！！

お申込みは事務局までお知らせください。

法人会員	20,000 円
個人会員	5,000 円
青年部会員	2,000 円

【鹿児島日英協会 事務局所在地】

〒890-8504 鹿児島市紫原1丁目59-1 (志学館大学内)
TEL: 099-812-8501 Fax: 099-257-0308
URL: <http://www.shigakukan.ac.jp>
Contact Email: sakasegawa@shigakukan.ac.jp